

第Ⅵ章 まとめ

第1節 検出遺構と空間利用について（第158図・第159図）

今回検出された屋敷境と考えられる溝状遺構5・6と主軸が並行する建物やその他の遺構の配置状況から渋谷氏及び郡司氏の敷地内の空間利用について概観する。

『佐土原御城下細見之図』の記名の仕方から両家とも調査区の北東方向に敷地内への入り口があったことが想定され、渋谷氏の敷地では門の可能性のある遺構（門21）が検出されている。渋谷氏の敷地の場合、そのあたりから屋敷内に入ると向かって左側に池状遺構73、右側に渋谷氏の主屋と考えられる建物1・2が見られる。建物1・2の奥には厩跡84・85が、南側には井戸70がある。また敷地内の南東部には建物3・4があり、廃棄土坑の類はその奥に掘られている。郡司氏の場合も北東方向想定される入り口から屋敷内に入るとむかって右側に主屋と考えられる建物5・6が、左側には建物7・8がみられ、建物8と隣接する井戸51がある。また廃棄土坑の類は敷地内奥である調査区南西部に多く検出された。

このように入り口を正面に敷地内を見ると主屋は左手、井戸は主屋の南側に存在し、廃棄土坑の類は入り口から遠い位置に存在することなど両氏の敷地内の空間利用には共通点がある。その一方、渋谷氏側では池状遺構が存在し庭園空間が想定されたものの、郡司氏側の今回の調査範囲内では庭園空間を想定させるような遺構が検出されなかったことが相違点である。

第2節 木札と『佐土原御城下細見之図』について

前述のとおり、本調査地点は『佐土原御城下細見之図』によると佐土原藩寄合格の「渋谷直記」と騎馬格の「郡司篤之助」の屋敷地となっている。このうち渋谷氏の敷地内と考えられる調査区北西側で検出された土坑179・177・184から出土した木札には「渋谷宇衛門」や「渋谷直」という墨書が見られた。青山幹雄氏の研究資料によると、渋谷直記は佐土原藩寄合格の渋谷氏の8代目当主であり、「渋谷宇衛門」とは渋谷氏の3代及び5～7代の当主が名乗っている名前である。今回の調査において『佐土原御城下細見之図』の記載された名前が出土遺物で確認できたということは注目すべき成果である。

第3節 近世の出土遺物について

第1項 薩摩焼について

これまでの佐土原城跡の調査においてあまり出土しなかった薩摩焼がまとまって出土したことは今回の調査成果の中で特に注目すべき点である。これまでは2次調査の播鉢（註4）や第8次調査の碗、土瓶、土瓶蓋、播鉢、鉢の出土例（註5）が知られているだけで高級品といわれる白薩摩や磁器の事例は皆無であった。本調査では堅野系の白薩摩の碗、土瓶、蓋等や象嵌技法が見られる陶器碗、苗代川産と考えられる磁器碗も出土している。なお本調査で出土した白薩摩の碗には「千鳥印」が多く確認される。この「千鳥印」のある白薩摩は近年の研究によると絵付けが施されておらず、いわゆる「御用品」ではなく「商売品」として作られたものと考察されている（註6）。また黒薩摩については碗、土瓶、土瓶蓋、鉢、播鉢、植木鉢、甕、徳利等多くの器種が見られる。これらのうち年代が判明したものに注目すると18世紀以後の資料が

多いような印象を受ける。

前述のようにこれまでの佐土原城の調査では薩摩焼の出土例が少なかったため、佐土原藩ではあまり薩摩焼の流通が活発ではなかったという意見があった（註7）。しかし、本調査区の出土状況はこの意見が当てはまらない事例と言えるのではないだろうか。今後、佐土原藩における薩摩焼の流通について再検討が必要となるだろう。

第2項 京焼の色絵陶器について

京焼の色絵陶器は島津宗家に次ぐ家格である鹿児島市垂水・宮之城島津屋敷や、今和泉島津家の屋敷跡である鹿児島市大龍遺跡G地点などの上級武家層の屋敷跡や寺格の高い寺院からの出土が多い傾向が見られるという（註8）。

本調査地点は寄合格、騎馬格という佐土原藩の中では上級武士に位置付けられる屋敷地であり、京焼色絵陶器がまとまって出土している。一方、佐土原城跡第8次調査地である鳴之口の中小姓格の屋敷地ではこれらは一点も出土していない。開発に伴って設定された調査区域であるため、未掘部分のことも考慮に入れる必要はあるが、このような遺物の出土状況は佐土原藩内での家格差を示していることが考えられる。

第3項 その他の遺物について

本調査からは第1項・第2項で考察した資料のほかにも多くの陶磁器が出土している。全体を見ると特に肥前系陶磁器の比率が最も高く、関西系陶器がそれに続く。肥前系陶磁器の中には柿右衛門窯の資料や亀山焼、望料碗、瑠璃釉陶磁器等の高級品も見受けられる。他にも瀬戸美濃焼、萩焼、備前焼、砥部焼、琉球など特に西日本を中心した各産地の資料が見られる。

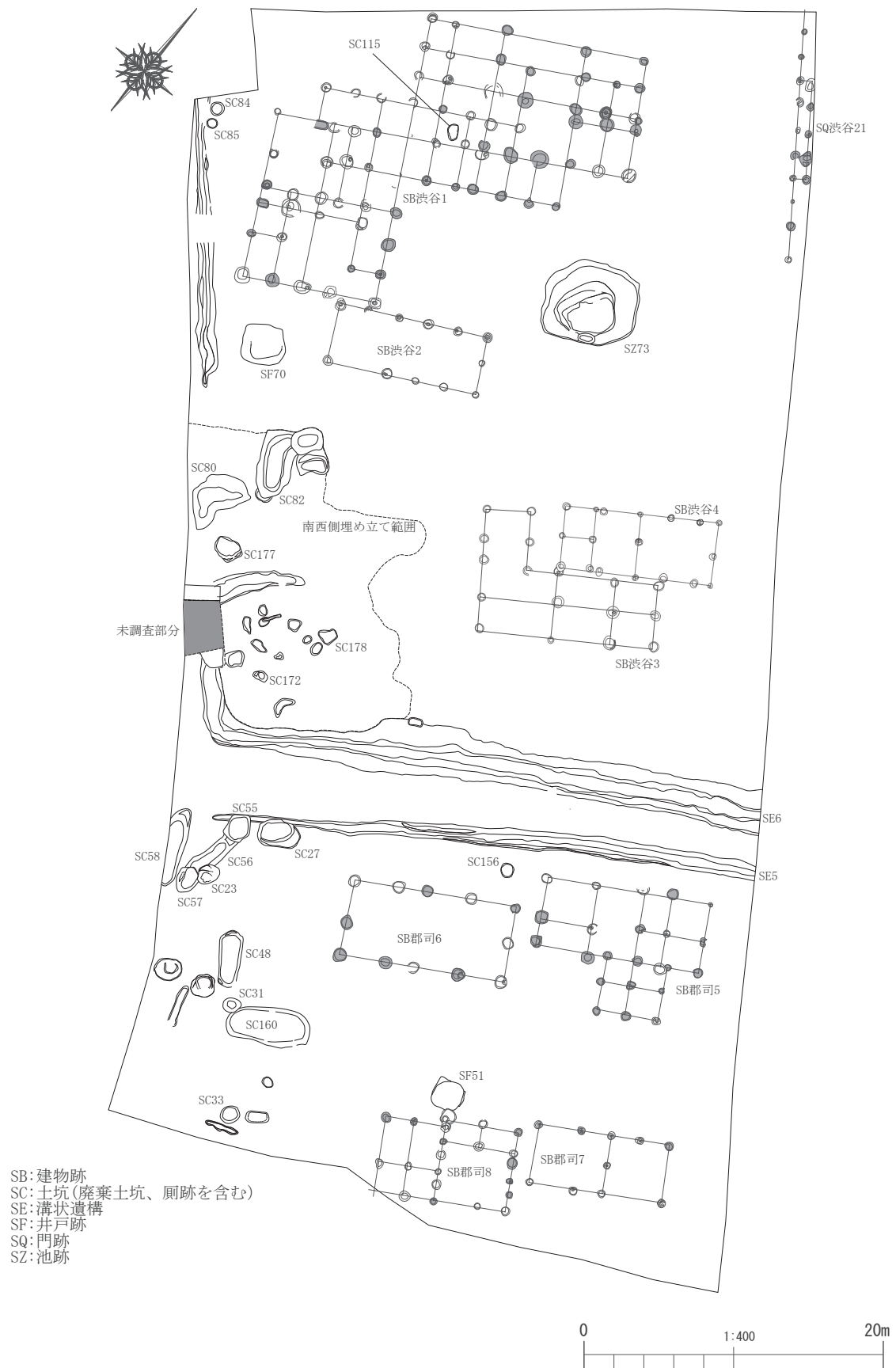
また墨書や刻書のある陶器が出土している（図版25上段ほか）。墨書には渋谷氏を示す可能性のある「渋谷氏」や使用・収納の場所を示す可能性のある「や二十」（No.146）・「二ヤ」・「一ノ九ヤ」、他にも「鳥枝氏」（No.316）・「白」（No.407）・「中」（No.430・431）などが確認されている。

6次調査と8次調査の遺構の検出状況と遺物の出土状況、横浜開港記念館が所蔵する佐土原藩筆頭家老の樺山氏の屋敷図から屋敷内に存在した施設などをまとめたものが第22表である。あくまで発掘調査が行われた範囲での比較となるが、佐土原藩における追手口の武士と鳴之口の武士との間には格差が感じられる。今後佐土原城下の調査事例が増えることでさらに武士階級の生活の様相が見えることとなるだろう。

第4節 城下町整備前の遺構と遺物について

第1項 遺構について（第160図）

佐土原藩の2代藩主島津忠興が寛永2年（1625）に山上の天守を破却して、山下に藩庁を移し城下町の整備を行ったとされる。それ以前の遺構としては溝状遺構83が挙げられ、そのほか出土遺物の検討から井戸16と井戸100が城下町以前の遺構と考えられる。また建物跡については城下町整備後の屋敷境となる溝状遺構5・6と主軸を異にする12棟が想定される。今回の調査区で検出された柱穴からは14世紀～16世紀にかけての貿易陶磁器の出土が目につく



第159図 渋谷氏郡司氏主要遺構配置図(S=1/400)

ことがその裏づけとなるが、各柱穴の出土遺物を詳細に検討できていないため、一部は城下町整備後の建物である可能性もある。佐土原城は15世紀には築城されていたと考えられており(註9)、建物等の変遷や配置を検討することで中世における本調査区の機能も見えてくるだろう。

第2項 出土遺物について

今回の調査で注目される資料のひとつに赤褐色を呈して凸面に青海波紋の叩き痕を、凹面に布目痕を残す瓦がある(図版21下段)。これは朝鮮半島の造瓦技術の系譜を引くものとして考察されており、文禄・慶長の役に参戦した島津豊久により連行された朝鮮の工人によって製作されたという考えもある(註10)。本調査区でこれらは主に柱穴や溝状遺構83から出土している。その帰属時期については溝状遺構83の出土陶磁器等から16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

舶載陶磁器としては龍泉窯系青磁、景德鎮窯の青花、福建省産の白磁・青花など一定量が出土しており、特に青花類の出土が目立つ。また華南産の翡翠釉の小皿(図版13下段中央上)が出土している。本資料は県内でも出土例が少なく注目される。

註4・註7 出口浩二2013「第26回 鹿児島陶磁器研究会報告 一宮崎市佐土原町茶屋窯跡の見学と佐土原城跡の出土品の検討一」『からから』No.27 鹿児島陶磁器研究会

註5 宮崎市教育委員会2016『佐土原城跡(第8次調査)』宮崎市文化財調査報告書第107集

註6 深港恭子2013「千鳥印のある白薩摩と商売焼についての一考察一」『立野並苗代川焼物高麗人渡来在附由來記』を中心に一『からから』No.27 鹿児島陶磁器研究会

註8 渡辺芳郎2010「鹿児島城下出土の陶磁器と薩摩焼」『季刊考古学』第110号 雄山閣

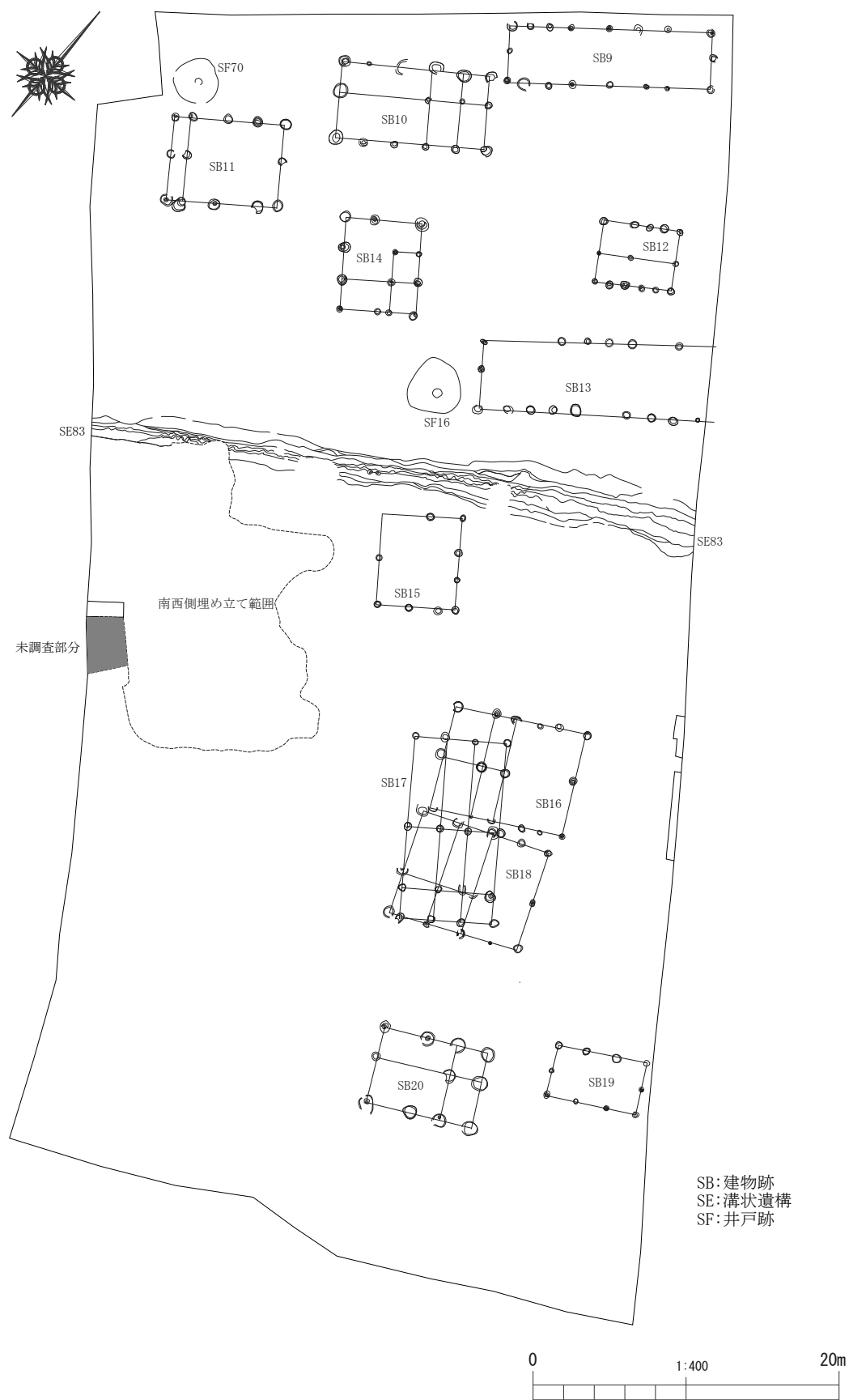
註9 末永和孝2011『佐土原城 天守を持った山城の歴史』鉾脈社

註10 中井 均1998「織豊系城郭の成立要素一南九州を事例をととして一」『織豊城郭』第5号 織豊期城郭研究会

表22：絵図や出土遺物から見た佐土原藩士の生活様式の違い

藩士名	樺山岩記	渋谷直記	郡司範平	池田・島児幸之助など
格	寄合(筆頭家老)	寄合	騎馬	中小姓
調査	絵図より	第6次調査	第6次調査	第8次調査
分限帖記載の石高	1000	300	110	23と35
敷地面積(調査面積より)	?	2000㎡以上	800㎡以上	400㎡以上
主屋の面積	253畳(461.48㎡)	約147畳(268.03㎡)	約38畳(70㎡) (約70畳:128.24㎡)	約24+α畳 (43.68+α㎡)
敷地内の建物の総面積	253畳+α(蔵3棟と物置と馬小屋)	約224.5畳(409.43㎡)	約115.5畳(210.84㎡)	約42畳+α(76.31㎡)
井戸	○	○	○	×
池	○	○	×	×
厠	○	○	○	?
土蔵	○	?	?	×
馬小屋	○	△	△	×
柿右衛門関連・望料碗・ 亀山焼・瑠璃釉陶磁器・ 犬人形	?	○	×	×
白薩摩	?	○	○	×
京焼風色絵	?	○	○	×
ガラス製品	?	○	○	×

※建物等の畳数については九州で広く使用されていたとされる京間(一畳:1.91m×0.95m=1.82405㎡)を当てた。



第160図 佐土原城跡第6次調査中世以前の可能性のある主要遺構配置図 (S=1/400)